

# 茶栽培でのIPMを活用した病害虫防除（鹿児島県）

## 1 概要

- ・緑茶は伝統的飲料であり、和食ブームから米国やEU等での需要が拡大しており、日本からの輸出も拡大している。
- ・鹿児島県の栽培面積は8,670ha、生産量25,800t(いずれも2014年、全国2位)となっている。
- ・鹿児島県は、環境と調和した農業を推進しており、その一環として化学農薬の使用を低減し、IPM技術を活用した茶の生産に取り組んでいる。

## 2 農薬のマイナーユース※に対するIPMの活用 ※マイナー作物またはマイナー病害虫への施用

### (1)マイナーユースの問題点

- ・茶の減農薬栽培では、チャノドリヒメヨコバイ、チャノホソガ、クワシロカイガラムシ、ハマキムシ類、カンザワハダニ、炭疽病等に使用可能な化学農薬が不足し、病害虫被害により安定生産が困難となっているという問題がある。

### (2)IPMを活用した問題解決に向けた原動力

- ・消費者の安全・安心な農産物への関心の高まりに加え、茶葉の輸出相手国の残留農薬基準値に対応できる生産のため、IPM技術の導入を推進する必要があった。また、鹿児島県の環境調和型農業の推進政策は、IPM導入を支援している。

### (3)成功要因

- ・生産者等が自らIPM研究会を設立し、スプリンクラーを用いたクワシロカイガラムシの散水による防除技術の実証等により効果を確認したことで、産地への技術普及が加速化した。
- ・炭疽病耐病性品種「ゆたかみどり」を導入するとともに、カンザワハダニ等の発生時期に茶の樹上から吸引作業を行うことにより害虫を除去する「サイクロン式吸引洗浄装置」の導入により、微少害虫に対しても化学農薬に依存しない防除を可能とした。  
※クワシロカイガラムシのふ化は、高湿度および湛水条件下で抑制される。ふ化開始以降、日中常に茶樹の枝が濡れるようにスプリンクラーで断続的に散水することで、クワシロカイガラムシのふ化を抑制し、高い防除効果が得られる。

### (4)取組みにおける障害、今後の課題

- ・茶の輸出にあたっては、残留農薬基準値への整合等、輸出相手国毎の規制に対応できる茶の生産・流通体制の確立が必要
- ・鹿児島県で使用実績の多い「ハマキ天敵」に対する海外での評価が未確立であり、輸出上の懸念。

### (5)得られた経験

- ・IPMが、県内の輸出向け産地でも積極的に活用され、農薬使用量の低減につながり(例:農薬費が県慣行基準より約6割減少)、残留農薬基準に差異のある外国に対してもIPMの活用により輸出が可能となることが生産者に認識された。  
(健全な茶づくりには植物本来の力を利用することが重要であり、そのための土づくりの大切さを再認識。)

## 3 成果

- ・本IPM技術の導入により、導入産地から米国、EU等への緑茶の輸出拡大(2014年:米国、EU等に約86t)を実現した。
- ・また、農薬使用量の大幅減(例:有明茶IPM研究会では、農薬費が県慣行基準より約6割減少)を実現し、安全かつ健康な飲料としてのPRにより、付加価値の高い茶生産を実現し、産地の活性化につながっている。



図1. スプリンクラー散水によるクワシロカイガラムシ防除



図2. 耐病性品種「ゆたかみどり」



図3. サイクロン式吸引洗浄装置

【問い合わせ先】  
農政部食の安全推進課  
生産環境係  
電話：099-286-2891